

メッセージアウトライン ヨハネ10：11～21「良い牧者」

「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます」(11)
良い牧者は羊を放牧し、見張り、また、連れ帰るだけでなく、いざ羊たちに何かの危険がおよんだ時には、自らのいのちをかけてそれを守り抜き、必要とあらば羊のためにいのちをも捨てるほどのものなのである。

羊の所有者でない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げてしまう。彼は羊のことを心にかけていない。彼にとっては羊が死んでも盗まれても、傷つけられても自分のいのちをかけるほど大切なことではないのである。かくて狼は存分に羊を奪い、散らすこととなる。(12-13)ここで言う狼とは、パリサイ人やイエスに敵対するユダヤ人たち、もっと広い意味では教会を迫害する者たち、異端やこの世的な思想、哲学なども含まれるだろう。良い牧者は自分の羊の群をよく知っている。(14)そして羊のほうもその牧者をよく知っていて、牧者が呼ぶとついていくのである。

羊の所有者である良い牧者は自分の群れの羊をよく知っており、羊たちもその牧者をよく知っているということは、実は父とわたしがお互いをよく知っているのと同様なのだといエスは話を展開される。(15)ここに父なる神と子なるイエスの親密性が現されている。愛する者はもっともよく相手の心を知り、また、自分の心を相手に示すことができる。父なる神と子なるイエス、イエスとイエスの羊たち、そこに同様な愛による親しく、また、霊的な関係があるのである。そして良き牧者であるイエスはここでも繰り返して、「わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます」と言われる。このことはやがて十字架の上において実現するのである。

「この囲いに属さないほかの羊」(16)とはユダヤ人以外の異邦人のことである。イエスはその異邦人たちをも導かなければならないと言われる。そして異邦人たちもイエスの声に聞き従い、ユダヤ人と共に一つの群れとなり、イエスが唯一の牧者となられるのである。→エペソ2:11-19 私たちも以前はまことの神を知らず、救いも希望もないものであったが、イエス・キリストの十字架の死による贖い、罪の赦しを信じたときに、神の救いの民に連なる者とされたのであった。イエスは私たち人間の救いのためにこの世に来られたのである。

イエスは羊のためにいのちを捨てると言われたが、それは死ねば一件落着ということではなく、また再びいのちを得る、つまり復活のことも視野に入れたことばであった。「復活」→Iコリント15:42-44,51-54

イエスはユダヤ人たちに殺される、いのちを取られるのではなく、自分からいのちを捨てられるのである。(18) イエスは子なる神として謙遜に、徹底的に父なる神のみこころに従われるのである。→ピリピ2-8

私たちも羊のことを心にかけない雇い人のように生きるのではなく、羊のためにいのちを捨ててくださったイエスを信じ、イエスにならって、父なる神のみこころに心から従う者となり、豊かないのちに生きる者となっていきたい。